

春だ、田んぼや畑へGo!

# 季刊地域

もう放っておけない！  
放置竹林

下限面積廃止で  
どうなる？

増やし方

ほんまもんの里の有機学校給食  
電力自給の始め方  
田んぼにスケート場  
長期中干しにもの申す

現代農業 2023年  
5月増刊  
2023年5月1日発行 昭和21年11月17日  
第3種郵便物認可 ISSN0289-3517  
定価943円  
Spring 2023  
No.53

季刊地域  
No.53

No.  
53

〔特集〕 下限面積廃止でどうなる？ 小さい農業の増やし方／放っておけない！放置竹林

定価 943円 本体 857円 送料 120円  
農文協

マイクロファーマーズスクールが人気  
農に関わりたい人は地元にいた  
副業で農業、半農半X、兼業・多業農家に  
下限面積廃止と地域計画  
小さい農業始める＆育てる 各地の動き



## 糸が、備えになる。

一人では立ち向かえない困難も、仲間の助けがあればきっと乗り越えられる。

みんなの安心を守るのは、みんなで備えた共済金です。

農業と地域の暮らしに、糸の力を。

JA共済は、助け合って備える保障です。

JA共済

雑誌 03476-05  
(L)-7/5

4910034760534  
00857

©Rural Culture Association Printed in Japan



CCCAふる dato ファームの3人。左から畠山秀兒さん、坂間則夫さん、及川和男さん



紫波町産業部の  
小川勝弘さん

「古館だけで人口は9000人。その中に勤めをリタイアした人が大量にいるわけです。退職者の男はやることがないんですね。よくわかります。家でテレビばかり見ている。すると、夫源病<sup>ふぶけ</sup>つて、奥さんが体調不良になる。そういうならないよう男を畑に連れ出して野菜をつくつてもらい、余計にとれた分を産直に出してもらおうと考えた」

名づけて「産直サポート農園」。場所は、元教員の畠山

さんが、孫に自分がつくった野菜を食べさせたくて借りていた畑50a。ここにニュータウンの退職シニアを引っ張り出そうと、古館公民館と連携して野菜づくり講座を開催することから始まった。

#### 農業体験農園を開設

それから4年。今のところ退職シニアはあまり引っ張り出せていないのだが、当初の構想は形を変えて思わぬ展開を見せていている。一つは子育て世代の若い母親の参加が多かつたこと。紫波町に移住してきたばかりの人も含め、畑が交流の場となつた。

産直サポート農園は「古館農業体験農園」と名を変え、20年春から本格スタート。農園を運営するのは畠山さんが農園長を務める「CCCAふる dato ファーム」だ。畠山さんに加え、元県職員でイタリア野菜を200種もつくる及川和男さん(75歳)が副農園長。さらに、同年代の横浜からの移住者・坂間則夫さんが事務局長として加わった。CCCAは「コミュニティ共創型農業」の略。農家と消費者が一緒に新しい農業をつくるという意味を込めて小川さんが名づけた。

22年は25人ほどが体験農園に参加している。参加者は、農業体験にかかる資材費などを利用料として春夏作で1万円、秋作3000円を負担し、とれた野菜は持ち帰る。参加者ごとの区割りはあるが、「体験農園」の名前のとおり、ふる dato ファームが肥料やタネ、苗を準備し、講習をしながら栽培体験をしてもらうという方式だ。

#### 畑には心身を癒やす力がある

思わぬ展開のもう一つは、町の地域おこし協力隊員・星真土香さん(41歳)が初年度から農園の参加者に加わった

## 遊休農地を活かして コミュニティ共創型農業



岩手県紫波町・CCCA ふる dato ファーム

文=編集部

写真=小川勝弘さん・星真土香さん提供



古館農業体験農園の一角、畑多楽園の活動の場となつてているハウス。中央が星真土香さん、左は藤原綾子さん。2人とも看護師

「きっかけは、産直組合の組合長からの相談だったんですけど、出荷者の高齢化で品物がどんどん減っている。このままでは産直がなくなるから、どうにかしてくれって」

話の主は、岩手県紫波町産業部で産業政策監・農村政策フェローを務める小川勝弘さん(65歳)。地域産業を振興し、農村の活性化のための調査研究をするのが仕事だ。県職員を定年退職後、地元の紫波町に貢献しようと、町が2019年度に新設したポストに就くことになった。「産直」というのはいわゆる農産物の直売所のこと。町内に10カ所ある産直の一つ、古館産直組合の畠山秀兒さん(74歳)が役場に相談に来たのは、小川さんが勤め始めて間もなくのことだ。

畠山さんは、役場がお客様を乗せたバスを出して、町内の産直を巡回するような仕組みをつくれないかといふ。だが、自家用車で買い物に来る人はたくさん野菜を買うだろうが、買い物かごを下げて巡回バスで来る客に量は期待できない。それに悩みのタネは、客足よりも出荷者の高齢による品不足だったはず……。

相談を受けた小川さんは目を付けたのは非農家の定年退職者だ。古館地区は、町の真ん中を横断する国道4号線沿いの北の端。40年ほど前、ここに盛岡市のベッドタウンとして古館ニュータウンという住宅団地ができた。当時、30代でここに家を買い住み始めた人が、いま職場の定年退職を迎えている。

#### 当初のねらいは直売所の出荷者確保

